

今号の「百歳の肖像」に登場されるのは、宝塚の渡辺てるさん。この九月に百四歳になられた。鎌倉生れの横浜育ち。歯切れのいい口調で、たくさん話してくださった。「最後に神様にバツテンをつけられないよう」楽しく暮らすよう心掛けておられる。

カラーページは輪島沈金作家、人間国宝の前 史雄さん。ひと彫りひと彫りに精魂を籠めた繊細な作品をカラーページで味わってください。創作もさることながら、前さんは今、後継者の育成に力を注いでおられるそうだ。

芦屋を代表するケーキ屋「アンリ・シャルパンティエ」のまだ三十代の新社長蟻田剛毅さんにもお会いした。父、尚邦さんを十年ほど前に取材した繋がりがあある。国道2号線沿いに、美術館のような喫茶店が出来た時には驚いた。デザイナーが主役となっていた父と、お菓子の原点に戻るべきとする剛毅さんとの葛藤を知った。熱い思いの新社長には、お菓子で驚きと喜びを演出し

てほしい。

歯科衛生士の空池智子さんは、お忙しい中、事務所へやってきてくださった。口腔ケアが、介護予防や生活レベルの維持に効果を発揮することが分り、高齢者施設に取り入れられるようになってきている。私たちも、心して、歯を磨き、口の体操をせねば……。『食』と『排泄』、ついお座なりになりがちな生きる基本がうまく行けば、老いを愉しむことが出来るはずだ。

そう、これに社交ダンスのような簡単にできる運動が加われば、さらに生き生きと暮らせるだろう。芦屋の喜楽苑では、入所者が「社交ダンスクラブ」の創設を提案したそうだ。「部屋に閉じこもるよりは、外へ出て身体を動かす」との要望に施設が答えた。実に、素晴らしい。

「東日本大震災特集」では、「災害時に船の活用を」と阪神大震災の経験から訴え続けている神戸大学海事科学部名誉教授の井上欣三さんにお会いでき

た。船の輸送能力、完結した生活空間はドクター・シップ、ホテル・シップとして利用すべきだ、と主張している。関西圏では二十五隻の船とやっと協力関係が結べたそうだ。

今年に入って暗いニュースが続く中、司 茜さんから、にっちでも紹介した詩集『塩っ辛街道』が第二十二回富田碎花賞に選ばれたとのメールが入った。前年に発表された詩集で最も優れたものと認められただけに喜びも一入だろう。

橋本武先生がイグ・ノーベル賞日本版「国際二匹目のどじょう賞 哲学賞」に輝き、にっちをずつと応援くださっている六甲味噌の長谷川憲司さんが「兵庫県技能頭功賞」を受賞された。

いずれも、長年にわたってこつこつと積み上げてきた努力が報われたのだ。「継続は力」を信じて私たちも頑張らなくっちゃ。と、明るい話題になったところで、皆様にとつて、二〇一二年が素敵な年になりますように。